

2022 AC

1st. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

集中特別講座 10/9~16

13日(朝) No.8

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるように「シエーム・イエシュア」と呼びつつ、学んで行きたいと思います。

1. 前回の復習と補填

● 前回は創造の「第三日」、植物の話を取り上げました。しかしそれは生物学的な植物ではなく、種を生じる草、種のある果樹を、地の「乾いた所」を歩むイスラエルの民がやがてそれを食べるために芽生えるようにという神のご計画が啓示されていました。そのことによって天の隠された奥義が開示され、神のみこころが地に表わされるということ学びました。

● 「種」は「神のことば」「神の福音」のメタファーです。種が地(女性名詞の「エレッ」^{אֶרֶץ})の中に蒔かれることで実を結ぶのです。種を蒔く人は神の御子イエシュアです。この地に人として来られたイエシュアは神の種を蒔きました。しかし神の選びの民であるイスラエルは、それを聞いて悟ろうとはしませんでした。それゆえ結ぶべき実はなく、いのちのない宗教の葉を茂らせていました。「霊であり、いのち」であるイエシュアの語ることばを聞いて悟る者がいなかったために、種は異邦人という地に蒔かれるようになり、今日に至っているのです。しかし「終わりの日」には、種は再びイスラエルの残りの者に蒔かれるという預言がホセアの長子「イズレエル」の名に預言されていたのです。

2. 今回のテキスト ①

●今回は、創世記1章14～19節にある「第四日」の内容です。

【新改訳2017】

14 神は仰せられた。「**光る物**が天の大空にあれ。昼と夜を分けよ。
定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。

15 また天の大空で**光る物**となり、地の上を照らすようになれ。」
すると、そのようになった。

16 神は**二つの大きな光る物**を造られた。大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。
また星も造られた。

17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らさせ、

18 また昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた。

神はそれを良しと見られた。

19 夕があり、朝があった。第四日。

2. 今回のテキスト ②

14 神は仰せられた。「**光る物**が天の大空にあれ。昼と夜を分けよ。
定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים

יְהִי **מְאֹרֹת** בְּרָקִיעַ הַשָּׁמַיִם
光る物(複数) あるように(単数)

存在の指示

לְהַבְדִּיל **בֵּין הַיּוֹם וּבֵין הַלַּיְלָה**
不定(分けるために) 昼 夜

וְהָיוּ **לְאֹתֹת** וּלְמוֹעֲדִים וּלְיָמִים וּשְׁנָיִם
なるように(複数) しるし(複) 例祭(複) 日(複) 年(複)

働きの機能

※ 「メオーロート」(מְאֹרֹת)は「マーオール」(מְאֹר)の複数で「**光る物**」を意味します。

「モーアディーム」(מוֹעֲדִים)は「モーエード」(מוֹעֵד)の複数で「(神によって)定められた時々」、すなわち、イスラエルの「**例祭**」を意味します。「しるし」(「オート」אוֹת)、複数形は אֹתֹת

2. 今回のテキスト ③

15 また天の大空で光る物となり、地の上を照らすようになれ。」
すると、そのようになった。

アル・ハーアーレツ

レハーイール

ハツシャーマイム

ビルキーア

リメオーロート

ヴェハーユー

עַל־הָאָרֶץ לְהַאֲרִיךְ הַשָּׁמַיִם בְּרָקִיעַ לְמְאוֹרוֹת וְהָיוּ

לְמְאוֹרוֹתの使役不定詞
照らすものとして

複数
光るものとして

複数
なるように

ヴァイエヒー・ヘーン

וְהָיָה כֵן

単数

14節と15節は
パラリズム
14節AB/15節BA

- 「光る物」(「メオーロート」 מְאוֹרוֹת)の機能は二つです。それは
(1) 神が定められた時、年、日の「しるし」となること。
(2) 地(乾いた所)を「照らす、輝かす」(臨在)しるしとなること。
※(1)と(2)は、聖書の基軸がイスラエルの民にあることを示唆しています。

3. 「定められた時のしるし」 ①

- 以下のように、確かに神は太陽や月や星を造られています。

【新改訳2017】詩篇136篇7~9節

7 大きな光る物(**רוֹאֲזֵי אֹרֹת**)を造られた方に。 . .

8 昼を治める**太陽**(**שֶׁשֶׁת**)を。 . .

9 夜を治める**月**(**יָרֵחַ**)と**星**(**כּוֹכָבִים**/複数)を。

- しかし創世記1章における「光る物」(複数)は、単に天体にある太陽・月・星ということよりも、神のご計画にある役割・機能を示す「しるし」であることを啓示しています。しかも、それらは地におけるイスラエルと深く関係し、イスラエルの例祭と関係しています(レビ記23章、創世記37:9、黙示録12:1「一人の女」参照)。

3. 「定められた時のしるし」 ②

●創世記1章14節にある「しるし」とは、「時のしるし」、つまり神のご計画を示す「時のしるし」のことです。その時のしるしを見分けるために、「光る物」が天に置かれているということなのです。

●聖書の中の重要な「時のしるし」とは、イエシュアの来臨のしるしです。その来臨とは「初臨と再臨」の両方です。たとえば、初臨のしるしとして、ユダヤの王としての誕生を東方の博士たちに知らせた「星」(単数)がその一つです(マタイ2:2,7,9,10/民24:17)。また再臨のしるしとしても「星」(複数)が関係しています(マタイ24:29~30, マルコ13:25, ルカ21:25)。当時の宗教指導者たちは神のご計画を啓示する「時のしるし」について無関心でした。今日の教会においてもそのことが言えるのではないのでしょうか。

3. 「定められた時のしるし」 ③

(1) 「定められた時々のため」

● 「定められた時々」と訳された「モーアディーム」(מֹאדִיִּים)は「モーエード」(מוֹעֵד)の複数形です。「モーエード」は「一定の時、一定の場所、会合、例祭、季節」を意味します。例えば「来年の今ごろ」(創17:21)というように、神の定めの時を意味します。

● また、主の例祭には春と秋の季節(春:過越の祭り、初穂の祭り、種なしパンの祭り、七週の祭り、秋:ラツパの祭り、大贖罪日、仮庵の祭り)が定められています(例:詩81:1~5)。これらの年ごとに繰り返される主の例祭の春の祭りと秋の祭りには、イエシュアの初臨と再臨という神の隠されたご計画が啓示されています。

※これについては「牧師の書齋」の『主の例祭における預言的意味』を参照。

3. 「定められた時のしるし」④

(2) 「日のため」

●原文では「日々」(「ヤーミーム」 יָמִים)となっており、「ヨーム」(יּוֹם)の複数形です。日々行われる幕屋(聖所)での礼拝、「安息日」を中心とする七日間の周期、「三日目」という秘義など。パウロが繰り返し語っている「聖書の示すとおりに」(聖書に書いてあるとおり)も「日のためのしるし」です。それはすでに聖書(旧約聖書)に示されているのです。

●ルカの福音書のなかにある「今日」(きょう)ということばは、単なるtodayではなく、神によって定められた絶妙な定めの時としての「今日」なのです(ルカ2:11、19:5,9、23:43参照)。

3. 「定められた時のしるし」 ⑤

● マタイの福音書は「預言が成就すること」を最も重要視しています。「これまでイエシュアについて預言されたこと」も、そして「これから起こること」もです。それはいまだ成就していない預言が、必ず成就することを確信させるものです。

【新改訳2017】 マタイの福音書16章1～4節

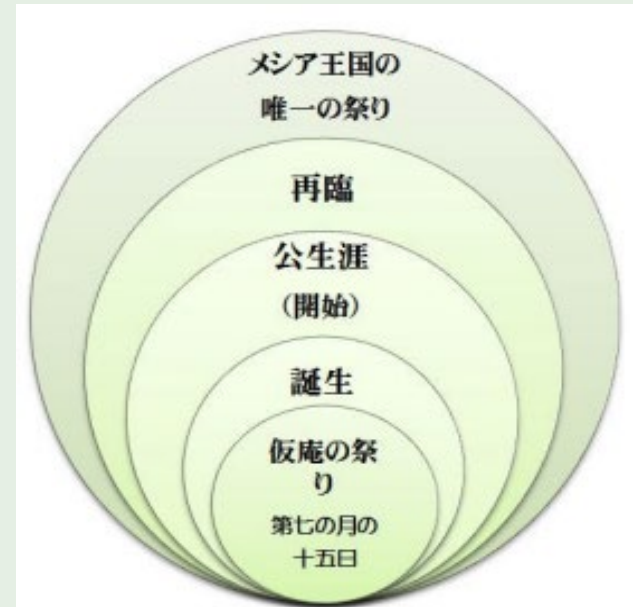
- 1 パリサイ人たちやサドカイ人たちが、イエスを試そうと近づいて来て、天からのしるしを見せてほしいと求めた。
- 2 イエスは彼らに答えられた。「夕方になると、あなたがたは『夕焼けだから晴れる』と言い、3 朝には『朝焼けでどんよりしているから、今日は荒れ模様だ』と言います。空模様を見分けることを知っていながら、**時のしるしを見分けることはできない**のですか。
- 4 悪い、姦淫の時代はしるしを求めます。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」こうしてイエスは彼らを残して去って行かれた。

3. 「定められた時のしるし」 ⑥

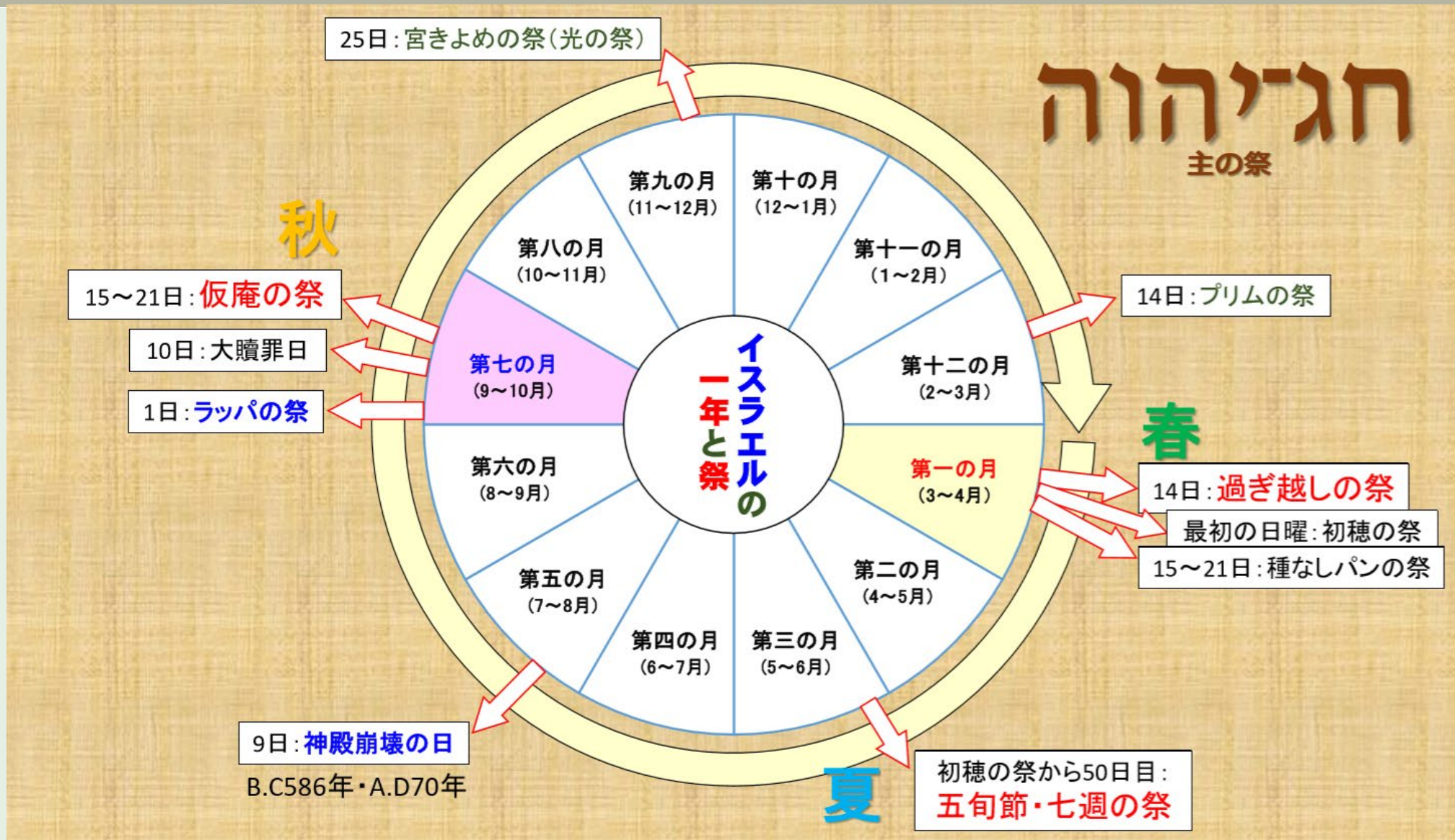
(3) 「年のため」

●原文では「年々」(「シャーニーム」 רֹאשׁ־שָׁנָה)となっており、「シャーナー」(שָׁנָה)の複数形になっています。7年の終わりごとに訪れる負債の免除と、50年ごとに訪れる「ヨベルの年」(解放の時)の始まりは「仮庵の祭り」の時です。またイエシュアの誕生も宣教の開始も「仮庵の祭り」の時です(ルカ4:14~21)。

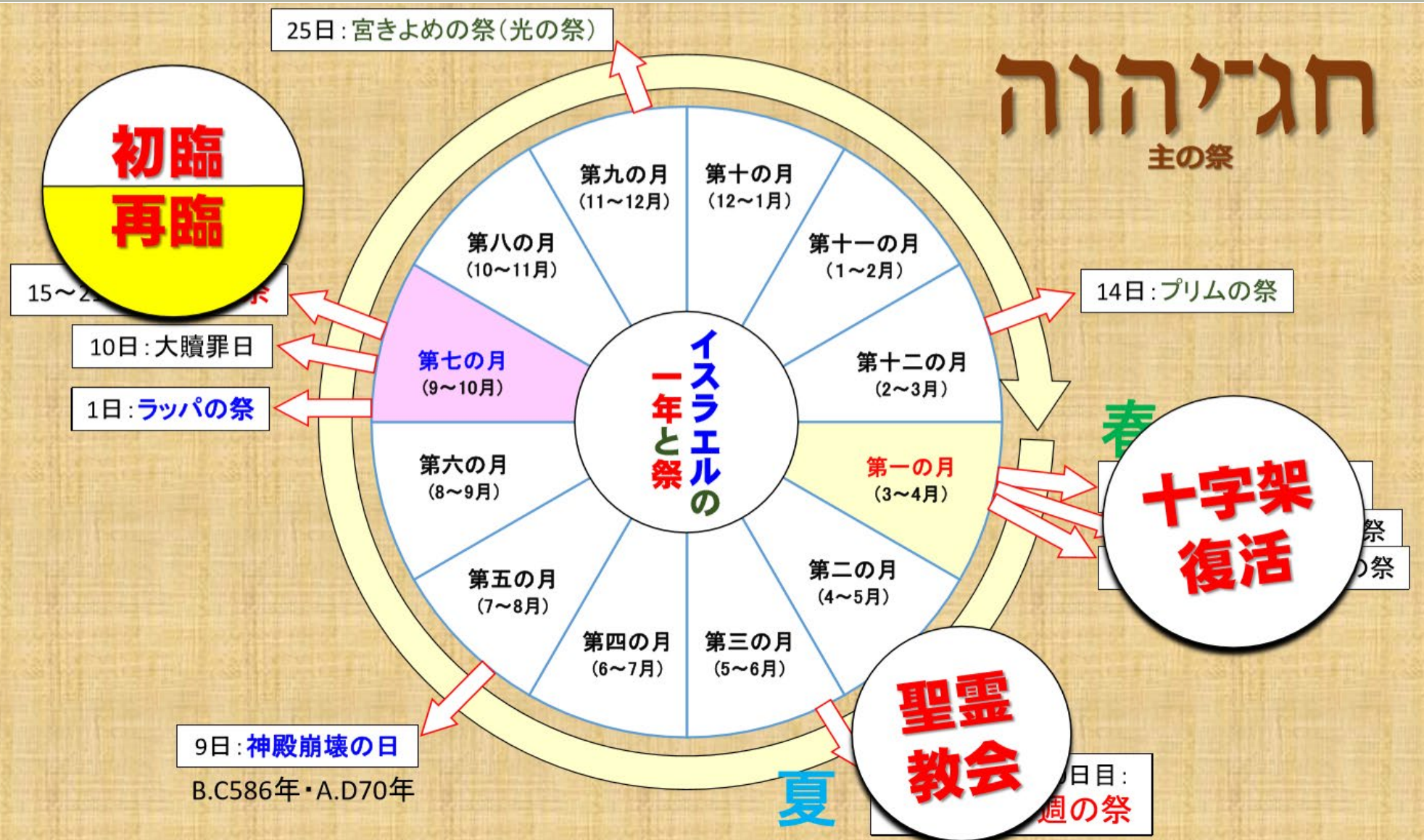
●特に19節の「主の恵みの年」とは「ヨベルの年」のことです。さらにイエシュアの地上再臨もこの時です。このように神が定められた時々と日と年は、神のご計画を啓示する「しるし」です。それらはこれまでも成就してきたように、これからも必ず成就するのです。



3. 「定められた時のしるし」 ⑦



3. 「定められた時のしるし」 ⑧



今回のまとめ

●今回も原文で見ていくことで、創世記1章は地球の創造の話ではなく、イスラエルを基軸とした神のご計画の啓示であることが分かるのです。特に神の計画は主の例祭に沿ってなされています。この主の例祭について、日本の福音派の神学校ではほぼ教えていません。サタンは神の計画を知られないように戦略を立てました。その一つは、イエシュアの誕生を神の暦ではなく、異教の祭り と合体させて12月25日としたことです。そのために、教会は神の計画を啓示した暦を喪失してしまったのです。ここに反ユダヤ主義があります。

●教会は長きにわたってサタンの戦略に操られてきたのです。サタンの戦略を見破り、本来の神の計画に目が開かれるためには、クリスマスという祭りから教会は脱脚しなければなりません。この宗教的風習に勝利するなら、神のご計画を示す「しるし」が主の例祭の中にあることをはっきりと知ることになるのです。アブラハムに対する神の約束は変わりません。「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う(=軽く見る、軽蔑する)者をのろう。」(創12:3)